

お茶うけ 第38話

働く女性たち

去年の12月の日本経済新聞に『働く女性 十選』と題して、日本の女性の働く姿を題材にした絵画10点が連載され、その冒頭に選者は「女性が輝いているのは働いているときかもしれない。生きていくと実感するのもそんなとき。画家はさまざまな分野で働く女性を題材にしてきた」と書いていました。そこには『古着市』『露店』の女性や、『先生と生徒』の女教師、『種痘』の女医など、さまざまな職業で働く女性の姿がありました。私は、描かれた働く女性たちの真剣な眼差しに、彼女たちの心を見たように思いました。



私が通った大学の教養部は町なかであり、市電の停留所から教養部までの100m程の道の両側に小さな店が10軒ほどありました。私が、初めて女性の働く姿に美しさを感じたのは、ある朝そうした店の前で、甲斐甲斐しく道を掃き水を撒いている若い女店員を見たときでした。それからサラリーマンになった私は、工場で、事務所で、客先など、さまざまな場所で、輝いて働く女性の姿を見てまいりました。

工場で働く女性たちの姿を紹介したものに、小関智弘著『おんなたちの町工場』という本があります。ここには、夫とともに、あるいは夫亡きあと1人で、中小企業の町工場を支えて働く18人の女性の人生の記録が記されています。

その一例を簡単に紹介します。

Kさんは、金型(かながた)の仕上工として優れた腕を持つ「渡り職人」として、いろいろな工場で精密な部品の製作に挑戦しては、さらに腕を磨き技術を高めていました。ある工場でKさんは、腕試しの課題として出された精密部品を作る金型を見事に完成させて高い評価を受け、その工場に留まって働くことになりました。工場長は、Kさんが作った金型を大手企業に見せ、「うちの工場には、これだけのものを作る腕の立つ職人がいます」と説明して、新しい得意先を増やしました。

やがてKさんは念願の独立を果たして工場主となり、Aさんと結婚して家庭を持ちます。Kさんの工場は、小さいながらも優れた技術で顧客を増やし、数人の若い人を雇い育てて順調でした。しかしある年、不心得な人に騙され莫大な不渡り手形を掴まされて、会社は倒産しました。その時Aさんは、若い人たちの将来のことが一番気がかりでしたが、「Kさんのところで育った職人なら是非うちで欲しいと」、多くのお得意さんから声がかかって、全員の就職先が直ぐに決まりほっとしましたと話します。それからKさん夫妻は、小さな仕事場に機械を据えて、朝の8時から深夜の2時過ぎまで、金型を仕上げプレス機で部品を作る作業を続け、借金の返済に努めました。そのころAさんは納品先のある工場で、床に落ちていた部品を見て、「うちのお父さんなら、これをもっと上手に作れる」と拾って帰りました。Kさんは、その部品を精度良く作ることが出来る優れた金型を、寝る間も惜しんで考案しました。その金型が完成したときKさんは、Aさんの手を握って、「これで借金が返せる」と叫んだそうです。Kさん夫妻は、8年かけてすべての借金を返済しました。

その後Kさんは、病のため不自由な体になりましたが、優れた金型を作る腕は衰えていません。Aさんは跡を継ぐ次男と一緒に夫を支えて、小さな工場を営んでいます。

この本が紹介する他の女性たちも、Aさんのように健気に輝いて働いています。

日本の優れた精密工業製品は、一流の技術を持った町工場(中小の各種機械器具製造業)が、協力し合って超高精密な機械部品を造り上げることに支えられていると言われますが、さらにその町工場をこのような女性たちが支えていることは、私にとって新しい発見でした。

以上

参考文献:

『おんなたちの町工場』 小関智弘著 現代書館刊 1994. 1.30. 第1版第1刷発行

(注:「渡り職人」については、次回説明します)